

あるじ
主の舞

エイナーの中枢、王都は、青の真中山エイレスイラプトウアの南西、その中腹に位置している。王都へは、鳥便、または、山の麓の玄関口エナリセから徒歩で向かうことができた。

クワーレンたちは、学舎で配布された『最終日限定 見習い専用鳥便切符』を使って、自然の村から王都への鳥便に乗った。この切符が配布されたのには理由がある。あるじ主の舞を鑑賞して、作文を書く課題が出されているからだ。作文も鳥便も大嫌いなチャルーは、痛む体と、ゴズの歯を手に入れられなかったこともあって、粘土をこねたようなひどい顔をしていた。

山肌を削ってつくられた王都への道は、鳥便からでもよく見えた。美しく研磨されて銀色に輝く石の道は、星の尾道と呼ばれていた。輝く石は、サテノム石といい、含有物により光の角度で七色の粒上の光を放った。

鳥便から降りるなり、クワーレンたちは星の尾道をたどった。街路樹の影と落陽の格子模様が道に落ち、王都へ向かうアベド達をまたたかせる。

エイリアルレル城の姿は、麓の道の始まりから十分見られた。祭り最後の夕陽を受けるエイリアルレル城は、残月のように仄かに光っていた。逆さ氷柱のほっそりとした優美な形は、幻想的な手のようだ。

王都に入る前に、彼らはそそり立つ豪華な城門に出迎えられた。初代女王エインナムと九匹の魔法動物の彫刻が踊り狂っている、てっぺんには、十の光線を放つひし形の金装飾があり、その輝きと大きさは、やってくるアベド達に畏れと誇りを抱かせた。一説には、アベド五人が腕を広げて並ぶほどの大きさがあるという。それが一番星のように明るく輝いているのだから、この城門も、

城門が守る王都も、エイネーアベドが誇りに思う場所として挙げるのも無理はない。

城門周辺には、銀色の制服に藍色の帽子を被る兵士の姿があった。クワールンは、はじめて、祭りで浮かれていないアベドを見た。彼らの目は冷静沈着で、祭りとは違うどこか別の場所にいるようだった。

彼らを通り過ぎ、城門をくぐると、焦げ茶の屋根と白塗りの建物が目に入った。これらは、王都の建物特有のもので、青の真中山エイレスイールアトウアの木と、削りだした石灰が使われている。もともと海底にあったとされるエイネー島では、生物の遺骸が堆積し、それが地殻変動で地上へでてきたことから、昔から青の真中山で石灰が採取されていた。

黄昏の光を仄かに放つ建物群は、洗練されていて見事だった。もともと邪気を払うためでもあった石灰の壁は、たしかに、見ているだけで澄みきった気持ちにさせられた。

建物の看板には、金色のエイネー文字が踊るように書かれている。『麗しの茶屋』『蝶の涙』『笑い葉』『菜の枕』……どれも高級の菓子や家具、香料などだ。買う用事はないが、見ていて楽しい。クワールンは、久々に安堵を抱きはじめた。

重荷をおいてきたからかもしれない、とクワールンは思った。自然の村にいた頃といまは、まるで正反対だ。今日という日は、現実とは到底思えないことばかりがおきた。すべては、青い竜の飛来で変わった。どうしてもよい風は燃やされ、炎の髪をした少女が現れた。おかしなことに、服が汚れていたが、間違はなく魔導師アトウナ様だった。

炎のように逆巻く赤毛と、力強いすみれ色の瞳。アトウナ様は、まるで3015番地のかまどのようだった。いままで気にもしていなかったのに、突如

明るく火を噴きはじめたあのかまど。それと同じように、気づいた時には、アートウナ様はそばにいた。

クワーレンが誰にも話さないと誓った眠りのアベドの話を、彼女が真摯に耳を傾ける様は、恐ろしいものだった。クワーレンは、内側の何かが融解していくような感覚を覚えた。それがたまたまなく怖かったのだ。変化がやってくるような気がして。

アートウナ様は、クワーレンの今までの「敵」を、たった一度の会話でぶちのめしてしまった。そうしてクワーレンは、蜘蛛やあけぼの、その他多くの子どもたちの影に、いまだに無意識に怯えていたことに、ようやく気づいたのだ。った。

正直、問題は解決していない。眠りのアベドは、まだエイネーにいるのだ。けれど、思わぬ協力者を得て、クワーレンは、逃げ腰の姿勢を見直し始めた。

周りは穏和な雰囲気に含まれていた。アベドたちは、趣きある景色に顔を和ませ、肩がぶつかっても笑い合う。途中で懐かしい友と出会っては、昔話に花を咲かせる。隣の店はどんなものだろうと、目を輝かせて顔を突っ込む。だんだんと風景は薄紫に沈み、街灯が灯されはじめた。

「あつ、ミレヌウン図書館！」

そう言って駆けだしたのは、イムサだった。通りの突き当りに、像が立つ広場があった。その奥に、イムサの言ったミレヌウン図書館がある。だが、イムサは像の前で立ち止まった。

「カメイユだ……」イムサは、感無量といった感じで、息を呑んだ。

「イムサ、おっさんが好きなの？」マウリンが言った。

「好き嫌いとか、そういうんじゃないやねえ。お前、もし主あかしに会ったらどうする？ 卒

倒するだろ？ それと同じくらいのことなんだ」

イムサは、「わからないだろうけどな」と呟いたが、マウリンは納得したように、
「ははあ……！」と言ってカメイユを眺めた。

カメイユは、小柄なアベドだった。杖を突き、貫頭衣を着て、片腕に本を抱
いている。眉間に皺が寄っているが、口角はわずかに上がっていた。

「カメイユは詩人だ。アスハリエテイク国を旅したはじめのアベドとも言われ
ている。アスハリエテイク語をエイネー語に訳したのも、彼が最初だぜ」イム
サはマウリンに向かって熱っぽく語った。

そんなカメイユが背にしているミレヌウン図書館は、エイネー最古の図書館
だった。学舎の師の棟のおおよそ二十倍はあろうかという図書館は、小麦色を
した石造りの建物だ。奥に一棟と、手前へ向かって二棟が向かい合うようにな
っている。夕陽を背に受けてそびえるミレヌウン図書館は、物々しい紫の影を
こちらに落とされていた。

イムサは図書館に入りたがった。「例えば、あそこに全種類の魔法動物がそろ
っていたら、例えばあれが菓子の家だったら、みんなも入りたいて思うだ
ろ？」

彼は嘆いてみんなを説得したが、もう主の舞^{あむし}まで時間がなかった。暗くなる
につれ輝きを増すエイリアル城は、彼を洪々、星の尾道へ戻らせた。

エイリアル城の表面は、鍾乳石のようにごつごつしていたり、貝殻の裏側
のように、なめらかに虹色に輝いていたりした。窓の部分は、夕闇に浮かぶ星
のようにきらめいている。

アベドたちは、ぞくぞくと城前広場に集まりつつあった。城前広場は、学舎
の中庭が十個入るほどで、心臓の目と呼ばれる塔が周囲を囲んでいた。塔の窓
は必ず広場の中央を向いていて、全体を見渡せるようになっていた。窓はガラ

ス張りされておらず、そこから身を乗り出して主の舞を待つアベド達あるじでにぎわっていた。

クワールンたちも心臓の目の一つに入ろうとしたが、すでに入口からアベドがあふれていた。彼らは、周囲を見渡した。広場では石灯が灯され、見習いの白い帽子、仕事人たちの装飾、髭、杯が浮かび上がって動いている。

「あの木の上はどう？」

肩を狭くしながらリリが叫んだ。エイリアル城のほうにジャメクの木が群生している。ジャメクの木は、枝の捻じれた硬い針葉樹だ。その香り高い葉から、昔は魔法動物除けとして葉を煎じて飲まれていたことがあり、邪を寄せ付けない守り手として、城前や病院、育ての丘にも生えていることがある身近な木だった。二股に分かれた幹や、捻じれた枝から、比較的登りやすく、見習いであれば一度は登ったことがあるくらいだ。

クワールンたちは、ジャメクの木へ急いだ。しかし、たどりつくと、すでに多くの見習いがジャメクの木に鈴なりになっていた。

「考えることはみんなおなじね」とエネーリス。

イムサは、二股の幹に足をかけ、枝を掴んで登り始めた。「もっと上ならあいているだろ」

次にマウリン、リリ、エネーリスと続く。クワールンも登り、最後にチャールが枝に手をかけたが、「きゃあ！」と悲鳴を上げた。「背中が痛くて登れねえ！」
そのとき、杖が地を叩く、堅く甲高い音が二、三度鳴った。主の舞あるじがはじまる合図だ。クワールンは、チャールに手を貸した。しかし、チャールは尻込みした。

「なにしてるんだ、早く来いよ」

「そんな高いところまで、俺、無理だよ」

怪我のことを言っているのかと思ったが、クワーレンは、彼が高所を嫌っていることを思い出した。よって、クワーレンは、幹の二股に立って片方の幹をつかみ、チャルーも同様にして、もう一方の幹にしがみついた。

「女王様は来ると思うか？」チャルーは、見習い帽子を押し上げるようにして汗をぬぐった。

「女王様は踊らないよ。なにかあったら危険だからね。ピ克蘭タが昔、そう言ってた」

保育部屋のと看、何度か主あるじの舞を見に来たことがあったが、ピ克蘭タはクワーレン（当時のナッシュツール）に、王都で売られる高級な飴玉を買って、肩車をして広場に連れて行ってくれた。クワーレンに見えたのは、アベドの頭と、遠くで跳ねる舞い手たちだけだったが、幻想的な思い出だった。

チャルーは、鼻を鳴らして、ジャメクの葉を一枚振じた。

イムサたちは、下から五本目の枝のところで座る場所を見つけたようだった。マウリンの声が降ってくる。

「ぶええ、蜘蛛の巣が顔に！」

その声はずいぶん遠くまで響いた。アベドたちはとっくにお喋りをやめていて、いまかいまかと、はじまりを待っていたのだ。群青の闇に浮かぶ広場は、鼠一匹通ることも許されないほど、神聖な空気に満ちていた。

クワーレンは首を伸ばした。アトウナ様は来ているのだろうか、一瞬、そう考えた。

一つの笛の音が虚空を切り裂いた。その長い音は、他の笛の音とまじりあい、不思議な旋律が広場に響き渡った。城の正面にいる楽団だ。その真ん中に、縞模様の背の高い帽子を被った語り部が、銀の布を敷いた台の上に座っている。

クワールレンは、反対に目を向けた。広場の端に、背筋を伸ばした小柄なアベドがいた。すらりとした銀のシャルメン（王家の伝統着である丈の長い一枚服）を着て、額から頬へ、流れ星のように光る線を描いた面をつけている。毛量のある白金色のかつらが、動くたび風のようになびいた。

舞い手は両腕を広げ、腰を低くし、滑るように踊った。シャルメンの裾が広がり、髪が流れ、動きを追う。しなやかに跳躍する様は、まるで蝶だ。

語り部が、抑揚をつけて歌いはじめた。

光の少女は逃れてきた

血を飲み、肉踏む、悪しき地から

こぼれて消える、同胞の命

貪欲な獣に、荒れ狂う海に

突き刺す嵐に、絶え間ない飢えに

月の光が導き手

遠海の果ての その先へ

月を頂く島を見よ その冠を授かり給え

少女の名前はエイネンナム

この地に光をもたらす者

光の少女は踊り続ける 解放の舞 祝福の舞

はじまりの前の 闇の中

それを見る者 別界の者

魔法動物 島の主^{めし}

言の葉聞く森 シルレイヤ

ただちに王に伝えたり

森の心臓 巨木の〈森羅〉

万物の循環 司る

織り込まれた数多の歴史 風に紡いで

〈森羅〉は少女に森を教えた

広場の端から、別の舞い手が現われた。頭にシルレイヤの葉をふんだんに差し、地衣類の外套をはおっている。その舞い手、〈森羅〉は、二重丸を描いた木の面をかぶっていた。観客に向け、妖しげに頭を動かす。背を縮こませ、ときに伸びあがり、白い少女の周りを足音もなく踊り続ける。頭の葉が、さわさわと不気味に鳴る。〈森羅〉を主とする自然の人たちが合いの手を入れた。

「〈森羅〉、〈森羅〉！」

すぐに次の舞い手がやってきた。アベドの背をゆうに超す紺色の山犬だ。頭は作り物だが、背中に本物の毛皮をまとい、長い尾を引いている。大きく開いた口からは真っ赤な舌が不気味に垂れ、牙が明かりで輝いた。舞い手は、獣の動きを熟知していた。木の棒で長くした前足で空を搔いては、地面を練り歩く。本能的に、アベドたちは互いの腕を掴み、数歩退いた。

語り部が次の節を歌いはじめる。

森はやがて

獣類の王を呼ぶ

紺の毛を波立たせ

獣王〈獣〉^{ガモ}は 唸り 囁く

「死を退け 生を生み出す光の少女
森を知ったそなたには

我が牙がつけた傷

この毛皮が温めた命

四肢、節足、翼、ヒレ

無足、鱗、卵無し

我が民が描く壮大な円を

知らなければならぬ」

〈獣〉^{ガモ}は、力強く少女の周りを駆け、少女は円を描いて回った。〈獣〉^{ガモ}は観客
たちに近づき、嗅ぐように頭を振った。アベドたちは、やってくる〈獣〉^{ガモ}の鼻
づらに手を伸ばした。

「〈獣〉^{ガモ}、〈獣〉^{ガモ}、〈獣〉^{ガモ}！」

生き物をつれたアベドたちが拍子をとる。〈獣〉^{ガモ}は鼻面を上に向けて遠吠えを
した。吠え声は楽団の笛吹きのもだったが、動きとぴたり合っていた。
クワールレンは、この妖美な舞に、いつしか身を乗り出していた。



広場で暴れ回っている〈獣〉^{ガモ}を、控えの天幕から眺めている者がいた。赤毛に紫色の瞳が光っている。焦げ茶の貫頭衣に身を包んだアトウナは、腕を組んで、遠吠えをする〈獣〉^{ガモ}を見つめた。

アトウナの後ろでは、アリアが舞いの準備をしている。先ほどノウアが慌ててやってきたところで、師は、アリアに片っ端から衣装を付けていた。

「平気よ、それは自分でできるから。ノウア、そんなに急いで来なくてもよかったのに」胴着から長い髪を出しながら、アリアは言う。

ノウアは、早朝に見つけた青の顔料を水で溶いていた。

「魔導師の長が主^{あるじ}の舞をすっぱかしてみろ。翌日の悪いことは、全部あたしのせいにされるんだからね」

ノウアの足元で、鳥人形ストロキントが同意するように身を縮めた。

アリアと喧嘩して、家出をするつもりだったアトウナだったが、結局魔導師たちとともにいた。それは、代役としてのクワーレンの可能性を探りたかったからだし、なにより、魔導師二人のことをまだ尊敬していた。ここに集う自分たちは、まぎれもなくこの国で三人だけの魔導師で、それは指先のささくれに気づくほど、近く濃密な関係にあることに変わらず、安易に離れることに痛みを伴うのだった。

クワーレンのことは、忙しさもあり、何も話せていない。だが、アリアの方も、ノウアでこそ、アトウナに対して何も言っていなかった。よって、アトウナは、二人との距離感を掴めずにいた。

広場には、新たな舞い手が登場していた。卵のような白い面をかぶり、手首から背後へ渡って絹の布をつけている。アトウナは、その小柄な舞い手に身

を固くした。あれは、見習いの象徴、ズイード 子だ。

生ける者たち、若い輝きを連れて来る

幼き我が祖ら 歌いながら 笑みをこぼし

地を駆け 飛び跳ね 光の少女を歓迎す

エイネンナムは 先頭きつて 闇照らす

ズイード 「我、子らの道しるべとならん」

ズイード 「我、子らの道しるべとならん」

ズイード 子の布は、舞うたびに風を孕んで膨らんだ。明かりを受け、面は輝きを発する。見習いたちが、仕事人をまねて手拍子する。

ズイード 「子、子！」

どこかで、「ユネイラ！」と呼ぶ声もした。どうやら、舞い手はユネイラという子らしい。アトウナは、唾を飲み込んだ。

「今年のユネイラって子は、上品な動きをするね。去年は腕白な坊やって感じだったけど」

後ろにノウアがいたので、アトウナは驚きながらも、「そうだね」と取り繕った。ズイード 子に対して羨望の目をしていなかっただろうかと心配になる。

アリアも続けてやって来た。彼女は、黒の胴着を着こみ、脚を黒紐で巻き、あの銀の腕輪をはめていた。背には紫の布を羽織っている。

アトウナは、一変したアリアの顔をこっそり見つめた。顔から首にかけて、青の線が、右に三本、左に三本、額に一本、顎から喉元に一本、合計八本入っ

ている。

「そんなに急ぐ必要はなかったわね」

アリアの顔は緩んだ。すると、線も歪んだ。

「まあ、次の舞い手たちが来たらすぐだろ」

ノウアはそう言うと、アリアにへグイメン魔への仮面を渡した。アリアは静かにそれをつけた。八本まつげ、一つの目玉。その紋章は、魔導師たちの心をざわつかせた。仮面はアリアの目と鼻を隠し、線だけが外へ現れた。

すると、ノウアがアトウナの手を握った。反対の手で、アリアの手も握る。老魔導師は、さっと弟子たちを引き寄せると、小声で言った。

「あたしらがどんなアベドなのか、みんなに見せてやるんだ。いいね、アリアア？」

「ふふ。そうね」アリアがおかしそうに仮面の奥で笑う。

「アトウナ、あんたはしっかり目に焼き付けとくんだ。これから何が起こるか。すべてをな」

「すべて？」

アトウナは、ノウアの白髪が頬に当たっているのを感じた。アリアの匂いもする。「どうか、どうしたの？ ノウア」

「いいかい、あたしらは、なにがあっても負けない」

ノウアは言った。

「たとえ偽物が現われようと、罪を着せられようと、あたしたちの本当の力は、そんなものでは濁らない。それを、民に知らせるんだ。あたしたちは、いままでの強いあたしたちに変わりない」

アリアが無言で頷く。アトウナは、胸がつかえた。同時に戸惑いも覚えた。誇りだ。魔導師であることに対する大きな誇りが、この一瞬、体中を駆け

巡った。アリエアが手を握ってくる。仮面の奥の表情は読めないが、許しと受容が感じられた。アートウナは、影踊る地面を見つめた。

広場では、四隅にそれぞれ舞い手が現われていた。律動に合わせ、静かに体を動かす。その動きはしだいに速さを増し、やがて、四人がそれぞれ独自の舞を舞った。柔らかな舞、羽ばたきの舞、素早い舞、流れるような舞……。

導く少女に あるじ 主たち

自らの力を与えたり

木のうろ頭 慈愛の ベニヨウス 〈守〉

小さな命 抱いて 芽吹かせ

安らぎと平穩 期待と続きを

円の切れ目を作らぬように

七彩の翼 打ち下ろし

怪鳥 バセーリヤ 〈百薬〉 苦痛を癒しに

傷をふさぎ 毒を引き抜け

再生の空を飛べるように

槍持ち 尾をもち 裁きの ゼンヨウ 〈狩〉

獲物を捕らえ 腹を満たせ

切れる頭と 切れる刃を

次も己が生きられるように

そして加わる 変化の力

三つの色の 目を持つ 〈創造〉カウクル

耳を澄まし、目を開け

己の色を忘れるなかれ

自ら世界を創れるように

四人の舞い手たちは、名が上がるたびに一声上げ、中央へ躍り出た。各仕事人たちが、興奮しながら主の名を呼ぶ。あるじ広場では、いまや八人の舞い手が乱舞していた。舞い手たちは、自分たちを呼ぶ声に応え、さらに舞を激しくする。演奏もさらに加速し、弦がはじかれ、太鼓が刻まれた。

アリアは去っていった。ノウアがお供としてついて行く。ストロキントがノウアの肩に飛び、アトウナをくるつと振り返った。

アトウナは、その場で立ち尽くしていた。足元に、シャーナとエラドルスがやってくる。シャーナは不安気に「ニイニイ」鳴いている。エラドルスは、その長い首を、アリアが向かった方に伸ばした。

「あんたたち、暴れたりしないでよね」

言われたシャーナは、アトウナを見て、次にエラドルスを見た。「あなたたちのことよね？」とでも言いたげだ。しかし、落ち着きがなかった。天幕を出たり入ったりしている。かと思えば、アトウナにすり寄って鳴いてみる。

普段ならこんなことはしないが、アトウナはシャーナを抱え上げた。嫉妬なのか、エラドルスもさっそく肩に乗り上がり、頭を鷲掴みにする。痛かったが、もう慣れたものだった。シャーナはこの位置に納得したようで、身じろぎ

せず、静かになった。

「あの見習いも来てると思う？ クワーレンって子」

アートウナはエラドルスに囁いた。エラドルスは、もしかもしやと髪の毛を食べている。頭皮によだれが染み込んでくる。両手が猫でふさがってどうにもできず、とりあえずクワーレンに見られていなくてよかったと思った。

次にもし彼と出会ったら、見習いたちがするようなくだらない話をしたい。アートウナは、乱舞をぼんやり見ながら思った。彼が魔導師の木を訪ねてくる様子まで、アートウナははっきり思い描いた。



ジャメクの木にしがみつクワーレンは、息をするのも忘れていた。舞い手の色と色とが混ざり合い、ぶつかり合って、また離れていく。これほど近くで主の舞を見たのは初めてだ。チャルーも前のめりになって、いつものお喋りもやめていた。

語り部は、最後の主たちを歌い上げる。

幼き王国 月の王国

これに起きた地の主

駆け引き（商）

ヤースィ

身の瘤 潤ミールの種を削りとり

国の血脈 作って 結ぶ

万物の記録者 知の結晶

〈賢アヤリ〉は 能を持つ者に

世の事柄と 導くこと

一から十まで 教えたもうた

富と繁栄の輝き 放つように

広場の左右に、岩のような紅色の舞い手と、白と金の外套をはおる舞い手が現われた。二人は、切れのある短い舞いを踊ったあと、中央の乱舞へ突っ込んだ。

アベドたちは叫ぶ。それぞれの主を、あるじこれでもかと。舞い手たちは目にもとまらぬ速さで地を踏み、手を叩き、頭を振り回す。音楽はさらに速度を増し、言葉は二重三重になって濁りはじめた。

与えられた力は凄まじく

せめぎ合っては 混じって別れて

金の嵐を生み出した

誰もが 誰をも 忘れてしまう

混沌の嵐 せめぎ合い

与えられた力は凄まじく

混沌の嵐 騒がしく

誰が止めよう 誰が止める 混沌の嵐

混じって分かれて 踊り続ける

永遠に 永遠に

緑、白、赤、紺、金、桃……、布ははためき、背は曲がり、足は跳躍し、腕は空気をかき混ぜ、円を描き、調子は外れ、怪しく高揚、光が散り、汗が飛び、筋肉がうねり、踏み、集結し、離れ、波うち、はじかれ、倒れ、喚き、叫び……。

ターンっ！

甲高く杖が打ち鳴らされ、静寂が訪れた。舞い手たちは、混然から静止した。城を背景に、新たな舞い手が立っている。暗い紫の布をまとい、ひし形の面に描かれた大きな瞳は、広場を凝視した。

その紫の舞い手は、空を切るように舞いはじめた。身につける金属の装飾が、動きにつれて鋭く鳴る。

クワールンは、息を呑んだ。魔導師は抑揚に合わせて、しなやかに踊る。その優美な舞に、広場の誰もが心奪われた。

太鼓が小刻みに鳴らされた。それに合わせ、語り部が力強く歌い出した。

秘密よりいできし 裏の主あるじ

混沌を聞き、混沌をもたらす

そこに隠れた真の意味

魔導師は聞く その言葉

〈魔〉^{グイメン}だけが知る真実を

一つの目のもと エイネーに
秩序の贈り物 与えられん！

魔導師の舞は精彩を放っていた。〈魔〉^{グイメン}は再び杖を打ちおろす。瞬間、すべての舞い手が動き出した。舞い手たちは、息のそろった、統率のとれた舞を見せた。拍手が巻き起こった。

十人の舞い手は輪を描き、中央で白い少女を囲んだ。すべての舞い手の一挙一動が揃う。右手を上げ、宙を抱き、しゃがんで再び伸びやかに立ち上がる。中央の少女は、そこでシャルメンの裾を掴み、一回転した。

すると、一筋の光のように背が伸びた。アベドたちはどよめいた。チャルーが声を上げた。

少女は、エサルノア女王に変化していた。驚愕と狂喜の悲鳴が上がり、アベド達は思わず両手を上げた。

「ありえねえ！」

チャルーは、クワーレンの肩を引きちぎらんばかりにつかんでゆすった。「おい、こんなことあっていいのかよ！」

「ああ、本物のエサルノア女王様だ！」

「信じらんねえ、見抜けなかった！」

《リーヴェン・タガ・シウナルウオ、イレツサ・ノエ・パーシエンノウ》

歓喜の騒音の中、女王は澄んだ声で、主の舞終了の実言葉^{あるじ}を発した。割れんばかりの拍手が、舞い手たちに送られた。舞い手たちは面を取ると、観客に向けて笑顔で手を振った。〈魔〉^{グイメン}を演じたアリア様の顔は、青い線で彩られ

ており、異質な強さを感じさせた。エサルノア女王様が彼女と微笑む。頭一つ分背の高い女王は、冠こそつけていなかったものの、不思議と静かな威厳があった。

拍手と笑い声、口笛に、舞い手たちの名前を呼ぶ声が、一斉に広場を埋める。

クワールンも歓声を上げた。女王様が発した実言葉アウシエスムンによって、すべての嫌なことがなくなったと思った。眠りのアベドも、ここまでは来られないだろう、と。



輝かしい主あるじの舞いの終結を、城前の階段に座って見ていたノウアは、誰かが近づいてくるのに気づき、振り返った。隣のストロキントも、首だけぐるっと回す。

やって来たのは、頭頂を剃った白髪の老人だった。白い外衣を羽織り、細身で、背がわずかに曲がっている。

「魔導師ノウア様……」

「やあ、ルドロー。どうしたんだね」

ノウアは顔を険しくした。ルドローは、秘庭書庫アーナラミで共に深の術モウベイヤを研究をするアベドで、師の人の管轄を担っていた。ルドローはしかし、沸き立つ広場の様子にしばらく心を和ませた。そして、中央の女王の姿に目を見開いた。

「なんと、地下の泥沼で唸っている間に、こんなことが起きていたとは！ ま

さか、女王陛下御自身が主あるじの舞に参加なさっていたなんて。エイネー建国以来、はじめてのことですな……」

「嫌なことで曇り気味になってる民たちを、なんとか前向きな気持ちにしようっていう陛下の試みさ。まったく、おかしな子だよ」

ノウアは、馴染み深い者に向ける目で女王を見つめた。ルドローはしかし、その冗談に冷や汗をかいた。彼は気を取り直し、腰をかがめて、ノウアの耳に呟いた。

その言葉に、ノウアは、さつと顔を強張らせた。

「なに、冗談だろ？」

ルドローは、悲しそうに「いいえ、残念ながら本当です」と頷いた。

「なぜ。どのようにして分かった？」小声でノウアは訊ねた。

「源力変換術の本に、いくつか抜けがあったんです。他にも、育成術の本などが、数枚破られていました」

「だが、あそこは八十年前に解放されていた。持ち出しはその頃にあったとしても不思議ではない……」

ノウアはある考えに至り、唇をかみしめた。

ルドローも、同じことを思っ頷いた。

「持ち出されて、どこかに保管されているということもあり得ます。いずれに

せよ、深モウベイヤの術は、すでに流出していたのです」

ノウアは、愕然とした。それが事実なら、深の術はすでに、そこら中を歩き回っていることになる。エイネーだけでなく、この世界のどこにでも。誰の手にも渡らないようにと封印されてきた術のはずなのに、その封印はとっくに破られていたのだ。

ノウアは、重々しく立ち上がった。

「案内してくれ。持ち出された書物が、他にもあるか調べないと……」

ルドローは頷いた。彼は、戻る前にしばし、アベドたちの陽気な笑い声に耳を傾けた。闇と恐怖にまみれた心を、少しでも癒すために。だが、彼はそれから、いそいそとノウアを連れて、城の内部に戻って行った。

彼らとすれ違いになって、城の中から一人の兵士が出てきた。彼は、〈伝令兵〉兼〈野駆け〉だった。

その男は、女王が舞を終えたのを見てとると、足早に近づいた。

彼は、半月前に城にやって来たきり昏睡状態に陥っていた男が、たったいま目覚めたことを知らせようとしていた。体中泥まみれになってやって来たその男は、ここに着くなり意識を失い、長い間生死の境をさまよっていた。その男の顔は、見るも恐ろしい犬のような顔をしていた。

だが、その男は先ほどより意識が戻り、〈野駆け〉の印を見せるや、仲間の一人を呼び寄せたのだった。

〈伝令兵〉兼〈野駆け〉として呼ばれた男は、顔中毛だらけになった仲間――ダーングの言葉を、一生懸命聞き取った。ダーングの声は、まるで獣の唸りのようで、しっかりと聞き取るのが難しかった。

ダーングは、歯がゆそうに何度も咳ばらいしながら、これだけ言った。

「……………アイツガ……………ダイヨンノ、マドウシガ……………ココニキテイル。……………ヤツ、ハ、シゼンノヒト、イエリオットヲ、コロシタト……………ミトメタ」